

2024年 2月 浜松聖書集会のご案内

(時間 : 午前 10 時 ~ 正午)

- 2月 4日(日) 集会 (アクト研修交流センター 36 セミナー室)
司会 : 永井 徹 感話 : 大屋 智代
聖書講話 : マルコによる福音書 15 章 33 ~ 41 節
「イエスの死、イエスの叫び、百人隊長の告白」 水戸 潔
- 2月 11日(日)集会 (アクト研修交流センター 36 セミナー室)
司会 : 武井 めぐみ 感話 : 鈴木 やす子
聖書講話 : ローマの信徒への手紙 1 ~ 3 章 「正しい人は一人もいない」 溝口
春江
- 2月 25日(日)集会 (アクト研修交流センター 36 セミナー室)
司会 : 岩田 堯
聖書講話 : ヨハネの黙示録 10 章
「腹には苦いが、口には蜜のように甘い」 武井 陽一

聖書を食べて、血となし、肉となし、命としなさい。 溝口 正

9 そこで、天使のところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使はわたしに言った。「受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」10 わたしは、その小さな巻物を天使の手から受け取って、食べてしまった。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると、わたしの腹は苦くなった。 ヨハネの黙示録 10 章 9 ~ 10 節

我々にとっての巻物とは、「神の言葉」の書かれている聖書である。聖書は単に持っているだけでは、もちろん何の役にも立たない。日曜日に教会や集会に出席したときに、指示された聖句に目を通すだけでは到底、御言葉を命とすることはできない。また、聖書を座右に置いても、ただ習慣的に読むだけでは駄目である。あるいは聖書に興味をもって研究しても、ただそれだけでは知的理解は進んでも命とはならないであろう。重要なことは、聖書を食べて、血となし、肉となし、命としなさい、ということである。聖書を食べるとは、全身全霊を傾けて主の御言葉を魂に受け入れることである。そうすれば聖霊の働きによって御言葉が命となって漲(みなぎ)り、ぱっちりと霊の目を覚ましてくださるであろう。御言葉は命であるから、生き生きとして内に働き御心にかなう歩みをさせてくださるであろう。これが再臨を待ち望む信徒の日毎のあゆみではなかろうか。 (『復活』第 410 号

2001年1月)

神の言は、「腹には苦いが、口には蜜のように甘い」という。即ち、神の言に忠実に生きようとする者には、甘味と苦味(にがみ)の両方の味が与えられるのである。たしかに聖書に記された神の言は、我々に峻厳(しゅんげん)なる神の義をもって審きを告げ、罪人の腸(はらわた)をえぐり、心臓を突き刺す痛みを与える。その苦汁たるや筆舌に尽し難い。"知る人ぞ知る"である。しかし同時に、神の言には、無限の愛と生命が満ち、罪人を赦し、天来の慰めと憐みが溢れているので、語るにしても、聞くにしても、我らを酔わしめるほどに甘く楽しい。この苦くして甘い神の言が人間を救うのである。信者がこの神の言を食べるとき、御言葉に生きる者として、立たしめられるであろう。我らの生涯は、求めずして苦汁に満ちたものとなるのである。しかし、その苦痛も、涙も、天来の甘い御言葉によって慰められ、涙を拭われ、揺ぎなき平安を賜わるのである。…神の言は甘く、かつ、苦い、然り、救いであり、審判でもある、一方だけしか味うことのできない者は、いまだ神の言を食いつくした

とは言えないのである。

(『復活』第367号 1997年4月)